



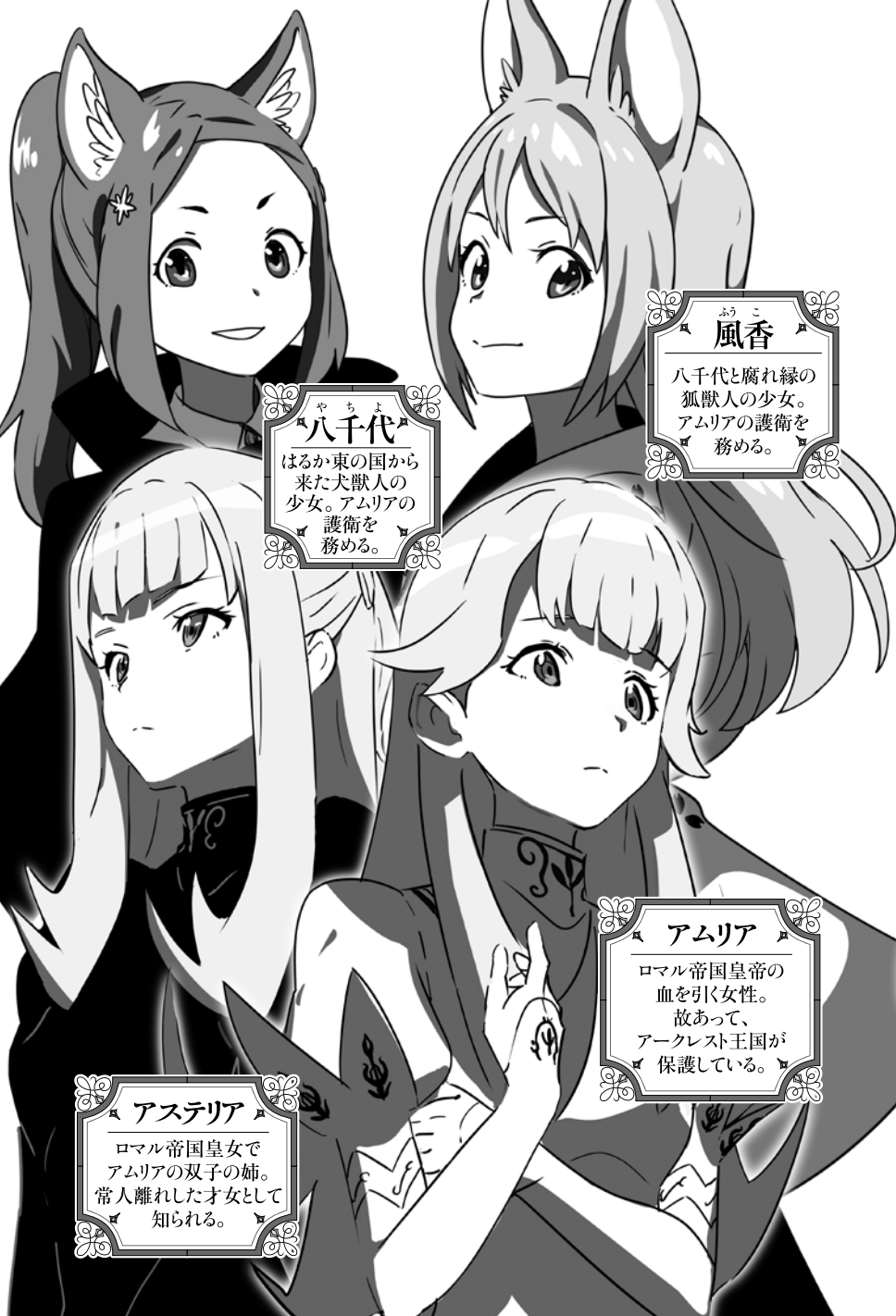
GOOD BYE,
DRAGON LIFE.

さようなら
こんにちは
龍生
人生 24

永島ひろあき
HIROAKI NAGASHIMA

目次

第一章	反乱勢力	7
第二章	皇女と獅子	52
第三章	双皇女の邂逅 かいこう	97
第四章	騒乱の気配	156
第五章	魔王軍侵攻	199



アステリア
ロマル帝国皇女で
アムリアの双子の姉。
常人離れた才女として
知られる。

八千代
はるか東の国から
来た犬獣人の
少女。アムリアの
護衛を
務める。

アムリア
ロマル帝国皇帝の
血を引く女性。
故あって、
アーケレスト王国が
保護している。

風香
八千代と腐れ縁の
狐獣人の少女。
アムリアの護衛を
務める。

グヴェンダン
ドランが作り出した
分身体。



ドラン
最強の古神竜“ドラゴン”の
転生した姿。
クリスティーナの下で
故郷ベルン村の発展に
取り組む。

リネット
稀代の魔法使いに造られた
リビングゴーレムの
少女。

第一章 ― 反乱勢力

「ふむ」

古神竜の魂を持つ転生者――ドランの口癖を零したのは、彼の分身体の一人である、人間寄りのドラゴニアン・グヴェンダンだった。

彼は今、ロマル帝国の隠された姫君アムリアの護衛として、リビングゴーレムのリネット、人造少女キルリンネとガンデウス、犬人の八千代、狐人の風香と共に行動している。

現在ロマル帝国では、崩御した前皇帝の娘であるアステリア皇女と、その叔父のライノスアートの大公の間で次期皇帝の座を巡る内紛が起きている。さらにその混乱に乗じて、これまで被支配者層として虐げられてきた亜人達が武装蜂起し、国内は三つ巴の争いとなっていた。

アステリア皇女の双子の妹でありながら、その出自から存在を秘匿されて長年軟禁状態にあったアムリアは、ドラン達に救出され、アークレスト王国にて手厚く保護されていた。

そんな中、ロマル帝国の惨状を耳にした彼女は、自らの目で実情を確かめようと、ドラン――グ

ヴェンダン達の協力を得て、帝国の各地を巡っている。

ほどほどの、あるいはまあまあな顔立ちの、それでいて風格と威厳のあるドラゴニアンの青年は、思案するように顎を右手で撫でている。

彼らが今いる場所は、ロマル帝国の版図の中で最も強大な反乱勢力の根拠地となっている帝国南方。かつては無数の亜人達が群雄割拠していたヒメルク海岸を見下ろす丘の上だ。

彼らは、遠方の諸国家との海洋貿易を担う重要な港湾都市の一つ、ウミナルを訪れようとしているところだった。

ロマル帝国に反旗を翻した反乱都市エルケネイでの戦いを終え、反乱勢力の最大戦力があるこの南方の地に足を運んだグヴェンダン一行。しかし、これまでの道程で見てきたモノが、彼らの足を鈍らせている。

ロマル帝国支配時代に敷かれた立派な街道からやや離れたところに停めた馬車の傍で、彼らはそれぞれ椅子に腰かけ、車座になって今後の予定を話し合っている。

既に目的地であるウミナルは目前なのだが、実際に都市の中にまで足を踏み入れるべきか否か、海から届く潮風を浴びながら、何度目かになる協議を重ねている。

一行は基本的にアムリアの意思を最大限尊重する為、行動方針はすぐさま決まるのが常であるから、これはいささか珍しい事態だ。

いよいよウミナルを目前に控え、最終意思決定を行うこの場面で口火を切ったのは、むすつとし

た顔の八千代であった。

「某はやはり、このウミナルに入るのは反対でござる！ ウミナルに近づけば近づくほど、この考えはより強固なものになったと言わざるを得ぬ」

狐人の風香が苦い顔で同意を示す。

「拙者もハチと意見を同じくするでござるよ。エルケネイではまだ帝国の支配を受けた者同士という事で、亜人種も純人間種も共に暮らしていたけれど、この辺りはどうにもこうにも……」

二人が、外見上は純人間種であるアムリアやリネット達を伴ってウミナル入りするのを反対するのには、理由がある。それは、ウミナルを含む近隣一帯を勢力下に置く反乱勢力『太陽の獅子吼』の支配体制によるものだ。

亜人種や非ロマル民族は、ロマル帝国によって武力で制圧され、被支配階級に落とされた歴史がある。その屈辱と非業の歴史に対する反動が暴力的な形で表れているのが、この太陽の獅子吼並びに彼らの傘下の勢力なのだ。

「ロマル民族に対して過敏になるのは、これまでの歴史を考えれば分かる話でござる。そもそも現状、戦争状態であるからして、過剰に警戒するのは当然でござろうとも」

八千代はまだ彼女自身が理解出来る話をする。

もし話がその範囲に収まるものだったなら、八千代と風香もウミナル入りを断固として反対はしなかっただろう。しかし問題はまだ、理解も納得も出来る範疇を超えた部分にあった。

「ロマル民族に対する憎しみや憤りが高じて、純人間種憎しにまでなってしまうているのでは、アムリア殿を連れてなど行けんでござるよ。絶対にいちゃもんをつけられるに決まっているでござるもん」

八千代が深々と諦めを含んだ溜息を吐いた。エルケネイを出立してからこのウミナルに近づくにつれて、純人間種に対する敵意と憎悪の感情の濃度が増していくのを、肌で感じてきた為だ。

アムリアとてそれは同じだろうに、彼女があくまでウミナルの内情を知りたいと希望し続けている事に、反対派の八千代と風香は頭を痛めていた。

風香もここに到るまでの旅路を思い出して、耳をペタンと前に倒す。

「同じ歴史背景を持つロマル民族ではない人間に対しても、排他的を超えて攻撃的になっているほどでござるからなあ。ロマル帝国とまとめて、今度は自分達が支配してやろうという考えが末端の兵士にまで行き渡っておるし……」

その発言を否定出来ずに、アムリアはしょんぼりとした様子で俯く。グヴェンダンと、彼につき従うリネット、キルリンネ、ガンデウスのメイド三姉妹達も、これといった反論の言葉を口にできなかった。

「反対派の二人に対して、賛成派のグヴェンダン達——メイド三姉妹は単にグヴェンダンに従うだけなのだが——は、そこまで強く意思を表示していない。それは、あくまでアムリアの意思を最優先に尊重するという態度を、一貫してとり続けているからだろう。」

「アムリア殿、せめて、外見を某のような大人にするとか、風香のような狐人にするとか、なんならグヴェンダン殿のようなドラゴニアンでもいいと思うでござるよ？」

「リネット殿達も同じでござるねえ。うーん、リネット殿達はグヴェンダン殿に倣ってドラゴニアンに変装して、お兄ちゃんと三姉妹で、悪い帝国に反旗を翻した勇氣ある人達を見に来た」としてはいかがでござろうか」

風香の提案に三姉妹は大きく心が動いたらしく、感情表現の豊かなキルリンネばかりでなく、情動の起伏が控えめなリネットやガンデウスまで体を揺らして反応していた。

グヴェンダンの手にかかれれば、いかなる魔眼や霊視能力を有している相手も騙し通せる幻術を行使し、偽装を維持し続けるのは容易い。

それを知っているからこそ、八千代達の発言である。

アムリアは顔を上げ、自分を想ってくれている大人と狐人を、意思の強さを感じさせる瞳で見つめる。

「確かに、そうすれば私でも穏便にウミナルに入れる事は間違いないでしょう。でも、八千代さんも風香さんも分かっただけでしょう？ 私は、人間を相手々に、彼らがどんな目を向けるかを知りたいのです」

あくまで人間としてウミナルに入り、どんな目を向けられるのか、どんな感情に晒されるのか、どんな扱いを受けるのか、アムリアはそれを知りたがっている。そうでなければわざわざウミナル

を訪れる意味がない事も、八千代と風香は分かっていた。

二人としては、そこはアムリアに妥協してもらって、せめて姿だけでも変えてほしいところなのだが、この隠されていた皇女はなかなかどうして頑固者だ。

「うー、やっぱりそこが肝心要でござるかあ。アムリア殿の意志の固さは買いでござるけれど、そこはほら、生きる上での賢さという事で妥協というか、状況に応じた適切な判断をするのがいいと思うんでござるよお」

そう言う八千代の方こそ、賢い生き方など到底出来っこないのだから、説得力の欠片もない。

それでも尻尾と体を左右にくねらせて精一杯説得を試みる姿は、彼女なりに必死である事の表れではあった。

風香も同じく、八千代の隣で同じように尻尾をふりふりして愛嬌を振りまくが、残念ながら色気はあっても、アムリアの意志を揺らがせるには可愛げの成分が足りなかった。

「ごめんなさい。八千代さんと風香さんがとっても心配してくださっているのも、きつとたくさん迷惑をかけてしまうのも分かっているのに。でも、私はこうしたいと思うのです。私にロマル帝室の血が流れている事実は望んだものではありませんが、その血の流れる私だから出来る事を本当に見つける為には、必要なのです。きつと」

「きつとでござるう？ でもアムリア殿の『きつと』は絶対という意味だって、拙者はもう学習したでござるよお。もう、アムリア殿の頑固者ン！」

ぶうぶう、と風香は頬を膨らませて抗議するが、口で言うほどに怒っていないのは誰の目にも明らかだった。なんだかんだで八千代と風香が最もアムリアに甘く、過保護なのだから。

八千代と風香が降参の意思表示をしたのを見届けてから、これまで黙っていたグヴェンダンがようやく口を開いた。

分かり切ってはいしたが、やはりきちんと結果が示されてから行動しなければ、小さいしこりが残ると判断し、成り行きを見守っていたのである。

「結論は出たな。アムリアはその姿のままでウミナルに入る。ふむ、リネット達もそのままで行かせるとして……これまでは少し立場を変えておいた方がよからうよ。エルケネイやここに来るまでの途中の都市だったなら、人間のお嬢様とその護衛で話を通せたが、ウミナルではそれで通じないだろう」

どんな形であれ、人間が亜人の上に立つ立場をとっては、火に油を注いで周囲からの過剰な反応を招くだけだ。言外にそう告げるグヴェンダンに、アムリアが悲しげに柳眉を寄せて首肯する。彼女としてそれくらいは理解している。

グヴェンダンに続き、事前に収集しておいたウミナルと近隣の諸事情をまとめた書類を手にしたリネットが、仕事の出来る才女の気持ちで、こう提案した。

「ウミナル並びに近隣の沿岸地帯は、全て太陽の獅子吼勢力が奪い返しています。ロマル民族でない人間種は、元々暮らしていた地域にこそ残っていますが、主要な都市部への出入りは禁じられて

います。蜂起時に取り残されたロマル帝国民達は、労働力として拘束され、様々な労働に従事させられているようです。実質、この辺りは太陽の獅子吼によって亜人至上主義の国家として再構築されつつあると言えるでしょう」

これまでの都市で見てきた光景とリネットの報告を照らし合わせて、八千代は早々に陰鬱な表情を浮かべる。根が陽性の八千代にしては珍しい、翳りを含んだ表情だ。

「なんだか、ロマル帝国時代と立場を逆転した扱いをしているみたいで、聞いても楽しくなさそうな話でござるなあ」

特に女子供や老人等、力の弱い者が虐げられる話にはめっぽう弱い八千代なので、その陰鬱さは自然と増してしまう。

「自分達がやられた事をやり返す。過ちを犯しても同じ歴史を繰り返す。人類の基本行動ですね——と、リネットも同意します。ただ、そっくりそのままやり返すのでは、ロマル帝国となら変わるところはないと考えているのか、枷を嵌めて、鞭を振るって休まず働かせるといった行為は行われていないようですよ」

「では、家族を人質にとつて最前線で肉の盾として使い捨てにしているでござるか？」

「蜂起以降散発的にロマル帝国と戦闘が発生していますが、人間の盾が用いられたという記録はありません。万が一の事態を危惧して、拘束した帝国民を戦闘に投入するのと重要な施設への立ち入りは、禁止しているようですね」

リネットの答えを聞いて、八千代は少し安心した様子を見せる。

「ほー、それは思ったよりもマシな扱いでござるな。我ながら他人の立場だから言える呑気な発言ではござるが、支配しているという状況が得られれば、どのように支配するかという点には拘泥していないのでござるかね？」

「帝国の軍勢を追い払い、父祖の土地を取り返した時点で、ある程度留飲が下がったのは確かでしょう。この二つを声高に主張して士気と結束を高めていたようですから、その後の具体的な行動については、末端にまで話が通っていないようです。理不尽な暴力がまかり通っていないという点においては、歓迎出来るかと」

「ふーむ、想像していたよりはひどくなさそうで、ちよっぴり安心したのでござるけれど、それでも嫌なものを見るのは避けられないのでござるうなあ」

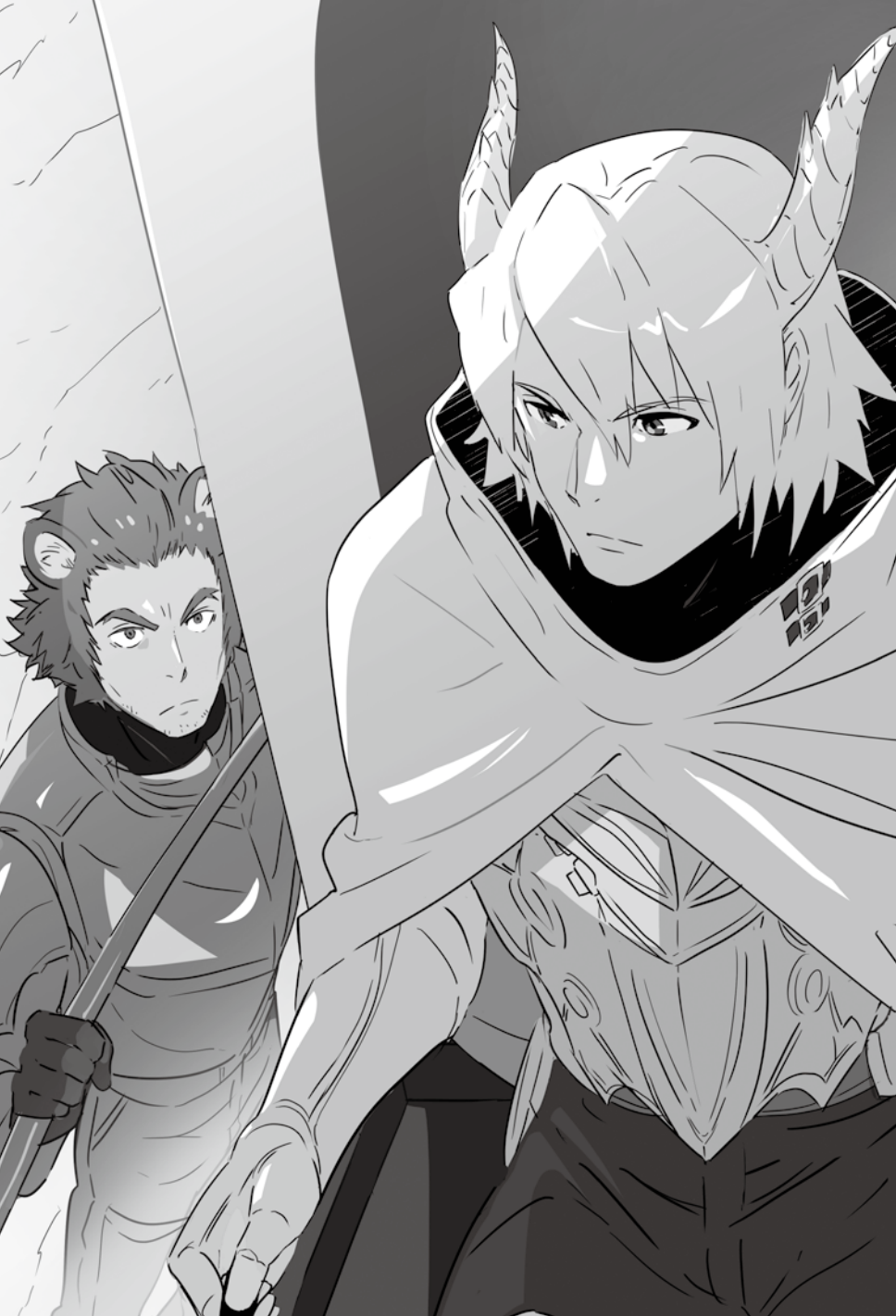
「見下していると思える理由と、暴力を振るっても許されると思える背景があれば、人間はいくらでも暴力的になれるのです」

ロマル帝国も反乱を起こしたものの関係なく、総じて人間はそういう生き物だと断言するリネットに、八千代は悲鳴に近い抗議の声を発した。

「リネット殿、ちよっと不穏な事を真っ正直に言いますでござるよお！」

「リネットは常に正直な言動と誠実な態度を心掛けております」

ツンと澄ました顔でそう言うリネットに、八千代はぐうの音も出なかった。



その後、グヴェンダン達はそれぞれの偽名や設定を確認し直してから、港湾都市ウミナルへと向かった。

——ちなみに、アムリアはアナ、リネットはトルネ、八千代はハッチ、風香はフウと名乗っている。

ウミナルはロマル帝国の支配以前から海洋貿易の要衝であり、商業・貿易都市として大きく発展してきた場所である。

ウミナルへ繋がる主な街道は三つ存在しており、グヴェンダン達の乗る馬車はエルケネイ方面と繋がる北側の道から町に入った。

街道の途中にある検問所を守る兵士達は、屈強な獅子人や猫人の男女が複数おり、前線から遠い立地とはいえ、反乱側の最大勢力としての見栄を張っている様子が見受けられた。

一目で亜人と分かる者達は滞りなく街道を進み、ウミナル入りを許されていたが、やはりグヴェンダン達の番となると、はいどうぞ、というわけにはいかない。

御者はグヴェンダンと八千代が務めていたが、馬車の中を改める段になれば、当然アムリアとリネット達の姿を見られる。隠さないと決めた以上、これは仕方のない流れだった。

馬車の中を見た獅子人の兵士が険しい目つきで御者台のグヴェンダン達を睨みつけ、手にした槍の穂先をいつでも突き出せるように重心をずらしはじめる。

その様子に他の兵士達も敏感に反応して、いつでも包囲出来るように何人かが動きはじめていた。散発的な戦闘が続いていた程度とリネットは言ったが、当の兵士達はまだまだ気を抜いてはいないようだ。

「お前達、この者達はなんだ？ 詰所で詳しく聞かせてもらおうか」

「この者達」とは無論、アムリア達だ。一行の統率者役を担うグヴェンダンが、なんら負い目を感じていない態度で堂々と応じる。

「ふむ、彼女達が君らにとつて見逃しがたい存在である事は重々承知している。こちらとて時間は惜しいが、いつまでにと制約があるわけでもなし。ウミナルの治安を乱すつもりはないのな。そちらの求めにはもちろん応じるとも」

グヴェンダンのドラゴニアンという希少性もさることながら、纏う風格と堂々たる態度から、自分が何か間違いを犯したのではないかと、兵士の方が判断を一瞬、迷うほどだった。

グヴェンダン一行は武器を取り上げられ、兵士達の監視の下、ウミナルを訪れた目的とアムリア達についての説明を行う。

そのまま平屋の詰所に連行され、一行の数が多かった事から軒先で尋問を受ける。

アムリアとリネット達四名を守るようにしてグヴェンダンが後ろに、左右には八千代と風香が立つ。そしてその周囲を武装している兵士達十余名が取り囲んでいる。

いささか過剰な人数とも思えるが、わざわざこの時期にロマル民族と分かる人間をウミナルに連

れてきたのを警戒しての対応だろう。

尋問を担当したのは先程の兵士の上役らしき、縮柄の虎人の女兵士だった。左頬から首筋にまで及ぶ斬痕と隙のない気配から、歴戦の猛者であるのが見て取れた。

黄色い毛並みに黒い模様のある髪の下から覗く顔つきはむしろ穏やかであるが、これはなかなか危険だと思わせる雰囲気がある。

「どうも、こんにちは。当検問所の責任者を務めております、サザミナと申します。部下から聞きました……ええ、本当にロマル民族の方と、そうでない人間の方を連れているのですね」

アムリアとリネット達を見るサザミナの視線は、今のところは激しさも穏やかさもない。

「当然、ロマル帝国の現状は知っていますでしょう？ ですので、どうしてこの方達を伴ってウミナルへ。怪しまれて当然ですから、貴方達も相応の事情を抱えているのですよね？」

正面から堂々とウミナルの検問所を訪れたのだから、何かあるのだと勘繰られるのは当然だ。その為に設定を練り直してあるので、返答するグヴェンダンはもちろんアムリア達にも動揺はない。

「ああ。ウミナルを訪れたのは、まだこの都市が他国との貿易を継続して行っているからだ。この地からより遠方に向けて離れるのには、ここから船に乗るのが手っ取り早い。君らはロマル帝国の人間は強く敵対視しているが、貿易相手に関しては別の話と、分けた対応を取っていると耳にしたからね」

ロマル帝国支配時代からヒシメルク海岸各地の港湾都市には、国外から多くの船が訪れており、

その中には当然ながら純人間種も含まれていた。

それは今も同じで、反乱発生後も貿易の為の船舶は訪れていて、太陽の獅子吼は彼らを相手に、ロマル帝国時代よりも関税を緩和するなど好条件での商取引を続けている。

こういった対応に関しては、純人間種への憎悪や攻撃性をロマル帝国に限定し、利益を生む国外貿易に関しては矛先が向かないように内部で情報統制をしていると考えられる。あるいは、対応に当たる人員を限定しているのだろう。

ロマル帝国を打倒した後の未来を考えれば、純人間種と亜人種が共存している他国家との繋がりまでも断ってしまうのは、あまりに損失が大きい。

帝国時代より貿易の条件を良くしているのも、帝国とは違うという分かりやすい意思表示と、なるべく多くの繋がりを残しておきたいという太陽の獅子吼の意向であろう。

「それで、どうしてこちらの女性達を連れてウミナルを訪れる話になるのです。国外へ行くだけなら、貴方とそちらのハッチさんとフウさんの三人で船主に相談すればよいだけの話では？」

サザミナからの再びの問いに、グヴェンダンが悠然と答える。

「そう考えるのはごもっとも。足を使って時間をかければ、あるいはお金を積めば、乗せてくれる相手も見つかるだろうが、効率を優先した結果だよ。彼女の家は国外のとある商会との繋がりがあ。家それ自体はもう没落したも同然だが、商会との繋がりはまだまだ活かせる。そこで帝国を出ようと考えていた私、ハッチ、フウと、道中の護衛とウミナル入りの手段を求めていたアナと思

惑が合致して、こうして一緒に行動しているわけだ」

アムリアの家というのは、今まさに国を三つに分けて内戦中のロマル帝国の事であり、国外の商会というのはアークレスト王国が密かに使っている商会を指す。

実際に間諜経由でウミナルに入っている商会とは事前に連絡を済ませており、情報の裏を取られても、何も問題がないように手配してある。

「ハッチとフウは見ての通り、外国の生まれだ。一度国元に戻ろうかという話になって、帝国を離れる術を探していた。私の場合は、単純に見聞を広める為だな。君らが帝国に反旗を翻さなかったら、海路ではなく陸伝いに東か西のどちらかに向かっていたところだよ」

言外に君達の行いの影響で、このウミナルを訪れたのだと皮肉を告げるグヴェンダンに、周りの兵士達が僅かに殺気立つが、サザミナは穏やかな表情を変えずに言葉を重ねる。

「では、確認を取りますので、商会の名前を伺っても？」

「ああ。アナ」

グヴェンダンに促されて、アムリアが口を開く。

「はい。私達が向かうのはアルダム商会です。今、こちらに寄港しているかは存じませんが、なんとか船に乗せていただいて、ここから離れようと……」

「なるほど、アルダム商会ですか。私でも聞き覚えのある商会ですね。では確認が取れるまで、しはしこちらでお待ちいただきますよ。よろしいですね？」

拒否を許さぬサザミナの静かな威圧を込めた言葉に、アムリアは臆する事なく正面から向き合い、頷いた。

十

アルダム商会からの使いが、私——グヴェンダン達の前に姿を見せるのに、それほど時間は必要なかった。

サザミナの部下によって連絡の届いた商会から、すぐさま商会の代表であるグドという穴熊人の大男が駆けつけて、私達の身柄を保証したのである。

こういう時の為にアークレスト王国が何十年前前から用意してきた商会なのだから、当然の結果と言えば当然の結果だ。

ロマル帝国への反乱の流れに便乗し、なかなかの商売上手と知られるグドは、その評判に相応しい裕福な身なりの男だった。

良質の絹と希少な染料をふんだんに使い、青に赤、黄に白と派手な色彩のバルーンパンツと、同じ色彩の袖なしのチョッキに白いシャツ姿。肩からは金糸の刺繍がびっしりと施された帯をかけている。

いかにも、気風のいい大店の主人然とした衣装だが、そのくせ穴熊の毛皮を首周りや胸元に纏っ

た体は横幅も厚みも凄まじく、背も今の私の体より頭一つ大きいほどだ。

衣服を脱ぎ捨てて肉体を晒せば、誰もが屈強な戦士と信じて疑わない逞しさだが、穴熊らしい愛嬌を感じさせるグドの顔には、にこにこ人好きのする笑みが浮かんでいる。

初対面の相手を極力威圧しないように配慮しながら、グドがアムリア達について説明する。

「サザミナ殿、この方々は間違いなく私共アルダム商会の客人ですよ。ええ、こちらのアナさんのご両親とは良い商売の付き合いをさせていただいております。サザミナ殿達にとっては、そのう……あまり良い印象を持たれないのは百も承知ですが……」

「そうですか。いえ、グド殿の言葉を疑うわけではありませんが、ウミナルの現状を知るロマル人が足を踏み入れるというのが、どうにも腑に落ちませんでしたので」

「いやいや、私共が事前に話を通し、アナさんをお迎えに参上していれば、このような事態は防げましたでしょう。こちらの手落ちでございますので、どうぞお気になさらずに。アナさんも、申し訳ありませんでしたなあ。もう少しウミナルの外でお待ちくだされば、店の者を大急ぎで走らせましたのに。いやいや、これは言い訳ですな。失礼を申し上げます」

「私の方こそ配慮が足りていませんでした。グド様だけでなく、サザミナ様達にもご迷惑をおかけしてしまいました」

グドに続いて小さく頭を下げるアムリアを見るサザミナや周囲の兵士達の視線は、変わらず厳しいままだ。アルダム商会に身分は保障されたが、それでも純人間種であるのには変わりないからか。

それともまだ怪しまれているのか。

「いえ、私達はあくまで職務を果たしているだけです。それでも、貴方のようなロマル人がウミナルの中で姿を見せて歩き回るのは勧められません。次に何か問題があれば、いくらアルダム商会の保証があつたとしても、見逃せませんよ」

種族の名の通り虎の如き威圧感を滲ませるサザミナに、グドが乾いた笑いを零した。

外見の威圧感と逞しさに反して胆が小さい——とグドを責めるのは酷であろう。サザミナはまだ若い、相応に修羅場を潜っているのは間違いない。

その修羅場がロマル帝国相手と考えれば、アムリア相手にかくも厳しい態度を取るのも当然——いや、むしろこれでも優しい態度なのかもしれない。

「分かりました。気を付けます。重ね重ね、この度はご迷惑をおかけしました」

私は再び下げられたアムリアの頭を横目に見ながら、今回とは比較にならない「迷惑」をかける事になるのだらうと、今の内からサザミナに重ねて頭を下げておいた。

戦火がこの地にまで及ぶか、それともサザミナが戦場に立つのかまではまだ分からないが、いずれにせよウミナルを騒がせるのには違いあるまい。

私達は最後までサザミナ達からの険しい視線を浴びながら、詰所を後にした。

十

グドの乗りつけてきた小型の馬車に先導されて、私達は改めてウミナルに入る。

馬車が発する直前、グドから彼の屋敷に着くまでは、くれぐれもアムリアの姿を見られないように、と忠告された。ウミナルでそれなりの地位と影響力を持つ彼にしても、アムリアを二度も庇うのは難しいのだらう。

さすがにアムリアも今回ばかりは自重して、馬車の幌の内側から覗くだけに留めている。

それだって、外部の視線とアムリアの視線が交わらないように、私がこっそり幻術を重ねている上での事だ。

「今進んでいるのは目抜き通りだな。馬車の中にも通りの賑わいが届いているだらう」

私が御者台から荷台のアムリアに話しかけると、小声で返事があつた。

「はい。まだ港ではありませんけれど、一層強い潮の香りが届いています。それに、色々な種族の方がこうまでひしめき合っている光景は、やはり圧倒されます。これまでの道のりではウミナルに近づくにつれて、人間の比率が減ってきましたが、この街では全く見かけませんね」

「ふむ、どこかに追放したというわけではあるまいが、まとめて隔離して、余計な衝突と治安の悪化を防いでいるのかもしれない。詳しい事情はグドが教えてくれるだらう」

アルダム商会の店舗はウミナルの港に近い位置にある。通りを進むにつれて、海産物を取り扱う店舗の割合がどんどん増え、寄せては返す波の音もより大きくなる。

漁では大変に頼りになる魚系の亜人達の数も多くなり、まだ鱗や殻を濡らしたままの者も少なくない。加工場や競りの行われている市場を尻目に、私達はアルダム商会の持っている厩舎に馬車とホースゴーレム達を預け、事務所へと案内された。

通りに面した、煉瓦を積み重ねた五階建ての建物である。その一階の奥まった場所にある代表の部屋で、私達はグドと改めて対面した。

私達の事と、アルダム商会がアークレスト王国の隠れ蓑である事を知るのは、商会の中でもごく一部に限られている。私達にお茶を用意してくれた執事もその内の一人だったろう。

グドは巨漢ながら愛嬌のある顔から緊張の強張りを感じて、飲みやすい温度に冷まされたお茶を一息に飲む。

「んぐんぐ、んむ、美味しい。皆さんも咽喉が渴いてはいませんか？ どうぞ遠慮なく飲んでください」

グドと長テーブルを挟み、長椅子に腰かけた八千代と風香、アムリアが勧められるままにお茶に口を付けた。

私とメイド三姉妹はいざという場合に備えて、アムリア達の周囲に立っている。

こちらのお嬢さん達三人がお茶を飲んで落ち着くのを待ってから、グドは表情を引き締め直して口を開く。何十年もロマル帝国とこの地に住む人々を相手に商売をしてきた歴戦の商人は、さて、私達に何を聞かせてくれるのか、何を問うのか。

「貴方達の事を知らされた時にはずいぶんと驚かされましたが、堂々とこのウミナルに入ろうとなるのには、さらに驚かされましたぞ」

批判されてもおかしくないのだが、グドの声音には純粹な驚きだけがあった。

「申し訳ありません。どう対応されるのかを含めて、このウミナルという都市とこの地の人々の事を肌で感じて知りましたのです」

グドに答えたのはアムリアだ。私達の誰よりもこのウミナルを知る商人と話をするには、この町を訪れる事を希望した彼女が最も相応しく、同時にそれが彼女の責任でもある。

「なんとも豪胆な。しかし、悪くすれば刃傷沙汰になる恐れもあります。サザミナ殿が言っていたように、次からは気を付けなければなりません」

「はい。あの……刃傷沙汰と仰いましたが、やはり、それほどまでにこの都市での人種間との関係はひどいのですか？」

グドは言葉を選ぶように腕を組み、目を瞑って小さく唸った。飢えた熊が発するような唸り声に、八千代と風香の耳が一度しおしおとへたれた。こっちも肝つ玉が小さいものだ。

「もちろん、良いか悪いかで言えば、悪いの一択になります。それはアナ様達もウミナルまでの道のりで存分に目にして来られたでしょう。帝国側での反乱を起こした者達や亜人、異民族達への対応もまた、ご覧になっているのでは？」

「はい。最初にライノスアート大公のお膝元から見聞の旅を始めましたので。エルケネイやその周

傭ではそれなりに亜人と異民族でも上手く手を携えていられたけれど、ここではロマル民族でなくとも人間種ならば敬遠されているですね。でも、あの……この港の辺りでは、人間種の方々が特に監視されている様子もなく働いているのをお見かけしたのですが」

「ああ、それはウミナルやこの辺りに住んでいる人間種ではありませんよ。海の向こう側、つまり交易国に在籍している人間種です。太陽の獅子吼の思想がどうあれ、それは彼らの傘下に属する者達に適用されるのであって、敵対関係にあるわけでもない交易相手に押し付けるものではありません。思想に影響を受けすぎた者達が暴走するのを危惧して、太陽の獅子吼側は港の周囲にはまだ落ち着いている連中を回して、余計ないざこざを避けておりますぞ。それでも雰囲気は陰悪になっていますが」

グドは溜息交じりに続ける。

「我が商会の人間種の者も、以前よりも仕事やりづらくなったと愚痴を零す始末。取引それ自体は以前よりも我らに都合の良いものになりましたが、雰囲気の変化は否めません」

長年ウミナルで仕事してきた者達ならば、当然こうした空気の変化を敏感に感じ取れるだろう。事前の調べ通り、交易の条件それ自体は帝国時代よりも良いようだが、この様子ではそれもいつまで続くか分からない。

グド達を含め、今はこのウミナルに寄港している者達も、より条件の良い港があったなら、そちらを利用する選択肢が出てくるはずだ。

「ではグド様、この都市に残っている人間種の方々はどのような扱いを受けているのですか？ 私達の調べでは、彼らは単純な労働力として扱われていて、戦場に兵士として連れて行かれる事も無いようですが」

アムリアの話を聞き、グドは感心した様子で目を細める。

「ほう。……アナ様が把握している情報に誤りはありません。しかし、不足はあります。さすがにロマル人でない者は捕われてはおりませんが、ロマル人は特定の区画に隔離されて、割り振られた仕事をこなす日々を行っております。一部、行政や軍事に携わっていた者達は、その能力と知識を買われて、条件と監視を付けて働いている者もいるようですな。ところで、アナ様」

「はい、何か？」

「古今東西の歴史を紐解いてみますと、こうした虐げられていた者達が反旗を翻して立場を逆転させた時、概ね二つに分ける事が出来ます。それが何か、お分かりになりますか？」

「二つ……相手を滅ぼすまで戦うか、途中で妥協するか、でしょうか？」

どうやらアナの答えはグドの用意していた正解とは異なっただけだが、その内容の過激さに、グドは口を大きく開けて驚いた顔を見せた。

虫も殺せそうにないアナの印象を大きく裏切る発言だ。この辺りは戦国乱世が長く続いた故郷を持つ八千代と風香、それに私から影響を受けてしまったからだろうか。

「いや、まあ、それはそう？ なのでしょうが。ええとですな……自分達がされた事をそっくりそ

のまま報復し返すか、奴らと自分達は違うと報復しないか、です。後者の場合は不当な差別をした者達に対して、自分達は決してそのような行いはしないと、平等を旗印に掲げる傾向が見られます。大抵、代を重ねると破綻しますし、ひどい時にはその言葉を口にした者の代で終わりますけれどね……」

古神竜時代の記憶を掘り返してみるに——なるほど、ちらほらと例外を見た記憶もあるが、概ねグドの言う通りだ。

「事前に聞いていたお話ですと、太陽の獅子吼の方達は前者であるように思えますが、何か違うのですか？」

アムリアの問いに、グドがゆっくり言葉を選びながら答える。

「恥ずかしながら、私達も当初は太陽の獅子吼達がロマル帝国に反旗を翻し、一定の成果を上げた後は同じような仕打ちをするものと考えておりました。しかし実際は、その予想よりも余程穏当な扱いがなされています。肝心なのは予想が違ったという事実に加え、何故予想と違ったのか、という点です。太陽の獅子吼を構成する諸種族は、ロマル帝国の支配からの脱却と父祖伝来の土地の奪還、そしてかつての敗北の屈辱を雪ぐ事を共通の目的としています。代々その思想を伝え、種族や部族内の結束を高めるといのは、分かる話です。そうして彼らは今の結果に繋がっておりますしね。ただ、その割に現状の扱いはずいぶんと手ぬるく感じます」

単に太陽の獅子吼が支配の屈辱から人間種を下に扱っているだけと考えては、見落とすものがある

ると、私達に教えた的樣子だ。

アムリアはグドの瞳をじっと見つめて、話の続きを促した。

「私達が現状把握している限りになりますが、どうやら太陽の獅子吼内部でも、思想といいますが、温度差があるのですよ」

「屈辱の歴史と憎悪に従って、自分達には復讐の権利があると声高に叫ぶ者と、虐げられてきた自分達だからこそ、帝国と同じになってはならないと訴える者……でしょうか？」

「それならまだ分かりやすいのですが、復讐の権利を叫ぶ側の中での温度差なのです」

「……つまり、どの程度復讐するかの違いでしょうか。誰に、どこまで、いつまで、どう復讐するか、という観点で温度差があるのですね」

アムリアの言葉に頷き、グドは話を続ける。

「その通りです。仮に過激派と称しましょう。その過激派の中の温度差が、今のウミナルの微妙に生ぬるい対応に繋がっているのです。ちなみに太陽の獅子吼内の穏健派はかなり少数です。差別されたのが先祖の代の話であったなら、もっと穏健派も多かったでしょうが、直接差別を受けた世代での反乱ですから、それも仕方のない話です」

他にも言いようはあるかもしれないが、過激派と穏健派の対立ではなくて、過激派内部での温度差とは……エルケネイの反乱勢力『七つ牙』より相手をしづらそうだ。

アークレスト王国にも、アルダム商会経由でこれくらいの話は伝わっているだろうが、私達で何

か新しい情報を伝えられるかね？」

「現状のウミナルを見れば分かりますが、目下、過激派の舵^{かじ}を握^{にぎ}っているのは、穩健派寄りの過激派^{くわきけんぱ}です。……自分で言っておいてなんですが、ややこしい呼称ですな」

「では、それぞれの派閥^{はばつ}の代表格となる方のお名前を冠してはいかがでしょうか？ 私達も注意しなければならぬ方のお名前を同時に把握出来すし、その方が分かりやすいかと思います」

アムリアの提案に、グドは手を打って同意を示す。

「おお、それが良いですな。では、穩健派寄りの過激派の代表は獅子人のアジアという青年ですから、アジア派。過激派の過激派は獅子人のレコという女性ですから、レコ派になりますな」

「ウミナルの状況を見ると、太陽の獅子吼の代表者は、穩健派のアシアさんという方なのですね」

「いや、そこがまたややこしいところでして、太陽の獅子吼の代表たる族長はアジアでもレコでもありません。黄金の鬘^{たてかみ}を持つ若き獅子人、レオニグス家のレグルです。彼は元々レコ派に近い思想の主でしたが、族長としての重責を担う中で頭が冷えたのか、感情を横に置いて部族全体の未来を考えるようになった節があります。レコ派が舵^{かじ}を握^{にぎ}っていたなら、他国の船でも人間種がウミナルを訪れるのを許さなかったでしょうからね」

そうなると、ロマル帝国南方の反乱勢力の主要人物はアジア、レコ、レグルの三名となるわけだ。アムリアの素性^{すじやう}を考えると、レコとレグルに会わせるのは厳しいが、アジアとは少し接触を考え

る価値があるかもしれない。もっとも、アジアもまた過激派ではあるのだが。

思っていたよりも複雑な太陽の獅子吼内部の事情に少し考えを巡らせてから、アムリアが口を開いた。

「そうなると、レグルさんという方の心がどちらを向いているのかを知るのが、重要ですね」

そう言い切ったアムリアの瞳を見て、両隣の八千代と風香が、あつゝと短く声を上げた。

あれはアムリアの覚悟が固まった時の瞳だ。次はレグルの獅子顔を拝みに行く事になりそうだ。

途方^{とほう}もなく強固な覚悟を固めたのが見て取れるアムリアは、その覚悟に基づいた行動に必要そうな情報をグドへと求めた。

「そのレグルさんは、普段はどのように過ごしておられるのですか？」

強い意志の輝きを放ちはじめたアムリアの視線を受けて、心なしかグドが背筋^{せすじ}を正す。

国家の後ろ盾を得ながら異国で堂々と商売を行う男の目にも、彼女が只者ではないと映ったのか。

「それは、今の彼は太陽の獅子吼の族長としてだけでなく、傘下の諸部族をまとめ上げる立場に就いていますから、奪取した総督府^{そうとくふ}を改装して、普段はそこに籠^{こも}っておりますよ。元々、自ら最前線に立って武勇を振るって味方を鼓舞^{こほ}する類の武人ですから、演習に参加している事も多いようすが。とはいえ、血気盛んで済まされる時期は過ぎたと、お小言をしょっちゅう貰^{もら}っているという評判ですな」

どうやらこの段階で、グドは嫌な予感に襲われたらしい。アムリアを見る瞳には、不審と疑惑の

色が急速に濃くなりはじめている。

「なるほど。総督府に行けば必ず会えるわけではないですね。そうすると、普段の行動を把握していないと、空振りに終わる事も多そうです。自由に使える時間は限られていますし、情報収集に力を入れないといけません」

いよいよ目の前の女性が何を考えているのかを察して、グドは愛嬌のある穴熊人の顔を引きつらせる。

当然だろう。詰所でサザミナから二度と騒ぎを起こさないようにと釘を刺されたばかりだというのに、彼女はよりにもよって太陽の獅子吼の最重要人物と会おうとしているのだから。

「まま、まさか……アナ様はレグル殿に会おうとお考えなのですか？」

まさかと疑っているのはこの場でグドだけだ。

私はもちろん、八千代や風香、リネット達だって、アムリアが直接自分の目と耳でレグルの人となり確かめようとしているのを確信していた。

それにしても、アークレスト王国の王城に匿かくまわれた生活をしていたにしては、いささか行動力が逞たくましくなりすぎてはいないかな？　ロマル帝国に来てからの今日までの日々で、アムリアの眠っていた資質を目覚めさせたか？

私は堪え切れず、小さな吐息を零した。

「うふふふ、さあ、どうでしょう。世間知らずな私でも、グド様の言われる事がとても難しいのは

分かりますわ」

「そ、そう、そうですね。いやははは……アナ様の態度に、つつい深読みなどしてしまいました。海千山千うみせんやませんの商人と渡り合ってきた自負がありました、これは精進しょうじんしないといけません。まだまだ未熟、未熟、はははは」

グドは引きつった笑みを浮かべる。

しかし……アムリアは難しいとは言ったが、不可能だとは口にはしていない。はたしてグドはそれに気付いていないのか、無意識に聞こえていないふりをしているのか。

どちらにしても、彼の胃と神経には、今以上に大きな負担をかける未来が待っていそうだ。

アムリアは友好的で可憐かれんな笑みを浮かべたまま、まだ動揺を残しているグドから次の情報を得るべく、あくまで静かな声音で畳みかける。

相手が弱気な態度を見せたなら、それを見逃さずに食らいつく。さながら猛獣めいた洞察力と攻撃性である。

「アナお嬢様は好機を逃しませんね。人の呼吸と間を読み取るのが上手です、とトルネは感心してしまします」

トルネ——もといリネットの言う通りで、どうやらアムリアは度胸ばかりか観察力や判断力もいつの間にか鍛えられていたらしい。アムリアがその気になれば、あつという間に人を手玉に取る名うての詐欺師さぎしになれそうだ。

リネットからの高評価が耳に届いていないアムリアは、決して嘘ではないが、心情の全てというわけでもない言葉で、グドへ語りかけ続ける。

「もし可能であれば、ロマル帝国に更なる波乱を招く若き獅子のご尊顔を拝したいと思っただけです。難しいうであれば、無理にとは望みません。ところで、先程は過激派の方ばかりお名前を伺いましたけれど、少数だけいる穏健派の代表はどなたのですか？ よくある劇の演目やお話にたえますと、レグルさんの妹君や恋仲の女性が穏健派の代表で、対立している場面ですが」

冗談めかして言ったアムリアに釣られて、グドも少し笑う。

「おお、そういえばお伝えしておりませんでした。いや、それにしても、いささか観劇に影響されすぎですぞ、アナ様。太陽の獅子吼で穏健派と呼べる勢力を纏めているのは、リオレという長老格の老婆の獅子人です。父祖の土地を取り戻し、ロマル民族を追い出したなら、それ以上戦火を広げる必要はないのではないかと、主に部族の若い衆を相手に訥々と語りかけているようです。長く争いと差別の歴史を見てきたからでしょうな。ただ……いかんせん、ロマル帝国がまだ大きな戦力を残しておりますし、初戦に勝利を重ねた興奮と歓喜がありますから、休戦や停戦を考える者は少数。終戦ともしなければ、ほとんどいらないようなものです」

「そうですか。私にこう思う資格があるのか分かりませんが、平和を望む声が小さいのは、悲しいですね」

偽りのない悲哀の色を浮かべたアムリアの表情を見て、グドもまた同じように悲しげな表情を浮

かべた。

グドは決して薄情ではないが、同時に商人として感情と行動を切り離せる人物だろう。しかしこの時ばかりは、目の前のアムリアにつられるように感情を素直に示している。

「ただ単に戦いが必要なくれば、それが平和というものではないのです。特定の成果を得た上でなければ平和に意味がないと、当事者達が考えている間は、そうそう争いは終わりません。それにしても、今のロマル帝国の状況は、他国の情勢もあってかなり複雑です。私の知る限りですが、さすがに他国の者に膝を突くのは勘弁だと、帝国の者も反乱を起こした側の者も考えているようですがねえ」

その「他国の側」についているグドとしては、自身が利益に与る為にもアークレスト王国が介入しやすい状況を望んでいるのだろうか。

まさか目の前にロマル帝国の隠された皇女がいると知ったなら、グドはどのような反応を見せるだろう。

ロマル帝国の皇女というアムリアの素性こそが、場合によっては状況を動かす切り札となり得る。アムリアも、札あるいは駒としての自分の価値を客観的に理解している。

以前ならばともかく、今の彼女ならそこまで考えが到っていてもなんらかおかしくはない。こうしてグドと話しながら、同時に自分をどう使うのが最も効果的かと思考を巡らせているのかもしれない。

双子の姉にあたるアステリア皇女は、常人離れした思考の速さを持つ才女として知られているが……ではアムリアはいかなるものか。

十

協力者であるグドと無事に接触出来た私達は、彼らに旅の荷物と馬車を預けて、早速ウミナルの中を見て回る事にした。

事前の詰所での件もあり、アムリアは不承不承という様子ではあったが、顔を隠す為にフードを被せ、アルダム商会が籍を置いている異国風の衣装に着替えている。

鮮やかな刺繍の施された藍色あいいろのスカートに白いシャツ、袖のない深緑色のコルセット、それにフード付きのショートコートという構成になる。

念には念を入れて、違う顔に見える幻術を込めた魔法の指輪を左手の中指に嵌めてもらっている。あくまで人間の姿のままでウミナルの中を歩き回りつつ、アムリアが二度目の騒ぎを起こしたと知られないようにする為の処置である。

もし再び詰所なりで素性を問われたら、アムリアがアルダム商会に留まっている間暇なので、商会と取引のある異国の女性の用心棒がてら観光していると言い張る予定だ。

用心棒をしながら観光をするというのは、嘘ではないしね。

かくして私達は、青い海から寄せてくる波の音が全身を揺らす港へと足を向けた。

港では、次の航海へと向けて商品となる香辛料や陶器、名産品である海産物の乾物に上質の絹、真珠細工、オリーブオイルなどが、遅い船員達の手によって船へと運び込まれていた。

それとは逆に、異国でたんまりと仕入れた茶葉や鉱物、反物たんもの、各種の酒、良質の木材や魔晶石まじうせきに精霊石せいれいせき、それらの加工品が船倉から運び出されてもいる。

「ふむ、奴隷どれいの類は見られないな」

家族と引き裂かれ、故郷を追われ、劣悪な環境で海を越えて売り買いされる、奴隷という存在に追い落とされた無数の人々。

前世で数えきれないほど目撃し、今も褪あせる事なく私の記憶に刻まれた光景は、幸さいわいにしてこのウミナルでは再現されていなかった。

奴隷という存在に関して、アムリアやリネット、ガンデウス、キルリンネは縁遠いが、八千代と風香は故郷で見た経験があるのか、私の言葉にしみじみと頷うなづいている。

「そのようでござるな。某と風香……シン、フウが難破して海を彷徨さまよっていた時は、たとえ奴隷に落とされてもいいから誰かに助けてほしいと、絶すがりたくなったものでござる。でもやっぱりひどい扱いは嫌でござるし……と、半々の気持ちで泣きべそをかいたもんでござるよ」

「あの時は鯨さめのお腹の中に収まってしまっているのではないかと、おしっこちびりそうにもなっていたでござるねえ。通りがかった漁船に助けられて、こことは違う港まで運んでもらって、九死に一生を

得たのでござったな、ハッチ。今にして思えば、人買いなりに売られなかったのは、彼らもまた口マル帝国に虐げられている立場であつたから、国は違えども同じ獸人を無下に扱うのは忍びなかったに違いない。理由がなんであれ、拙者とハッチとしては感謝するばかりでござるよ」

「ハッチさんとフウさんの故郷でも、奴隷制度はあるのですか？」

アムリアの問いに、ハッチこと八千代とフウこと風香は二人とも、うーんと考え込む。

これまでアークレスト王国で過ごしている間に、八千代達は故郷である秋津国の歴史についてはそれほど詳しく話さなかったらしい。

話して楽しい話題ではないのは明らかで、二人とも分かりやすく悩んでいるようだ。

下唇を突き出したささかはその顔の八千代が、物憂げな声で故郷の事情を口にする。

「飢饉や戦禍に見舞われた時に、口減らしと一時を凌ぐお金を得る目的で、子供を奉公に出す話は今でもあるのでござる。一応、昔の人間の売買とは違う扱いではあるけれど、年貢上納の為の身売りは認められているし、我が故郷に奴隷はいない、とは言えないでござるよ」

「戦国の頃には、義に厚く信心深く、己の信念を貫く聖君と讃えられた大名も、民と武士を対等と示して領民に慕われた名君も、人間の売り買いはしていたでござるしねえ」

明るく楽しく幸せだけが続いている歴史というのは、どこの国にもないものだと、風香は哀しむでもなく、ただそれがこの世だと悟ったような声で締めくくった。

時折含蓄のある事を言うから、この二人を底抜けに陽気で楽しいポンコツ娘達と言い切れない。

「二人からの答えはどうだった、アナ？」

私がそう問うと、アムリアはしっかりと口調で答えた。

「昔の話であるのなら、今は少しでも違うという事でしよう。今も近い制度が残っていても、誰かがこのままではいけないと考え、それを国家単位で広めて改善した結果です。そしてそれをこれからも続けていけば、いつか奴隷は遠い言葉、遠い概念に変わるでしょう。その逆の可能性もあるのですけれど、私は私の見出した道を歩みたいと思っています」

「これは、思ったよりも頼もしい言葉が出てきたな。ハッチ、フウ、あちらではどう過ごしているのだ？ 帝国に来てからの影響もあると思うが、アナはずいぶんと逞しくなっていると思うぞ」

私の言う「あちら」とは、アークレストの王宮を指す。それなりの教師が用意されていたのは簡単に想像出来るが……

「周りの皆さんのご厚意で大いに学び、大いに食べ、大いに遊び、大いに眠りはしたでござるけれども、それ以上の事は特にはないと思うでござるよ」

「拙者も拙者も。ハッチと同じ感想でござるな。アナ殿ご自身はどのように感じておられるの……」

「私は、ですか？ ええと……ハッチさんの言う通り、今もですけど、私の我儘を叶えていただいたと感謝しています。そのお蔭で本当に、たくさんの方の事を学べて、たくさんの方に生かされていると知り、その恩を何かしらの形で返したいと思うようになりました。それに、帝国に来てから

見たものの全てが、私に流れる血の責任を、本当の意味で理解させてくれました。あそこから連れ出していただいてから出会った全ての人々が、今の私を形作ってくれたのだと思います」

「今の君は過去の結晶か。ふむ、ならその大した肝の据わり方も私達の影響というわけだが、これからの君がどうなるのか、どうするのか。楽しみでもあり、どこか恐ろしくもある」

私が偽りない本音を口にすると、これまで黙って話に耳を傾けていたリネットが、アムリアへと感嘆の眼差しを向けた。

「グヴェンダン様にここまで言わせるとは、本当にご立派です、アナお嬢様」

「まあ、ふふ……確かにグヴェンダンさんは大抵の事では驚かない方ですものね。私、凄（まじ）い事が出来たと自信が持てます」

お淑（しと）やかに笑うアムリアに、リネットとガンデウス、キルリンネ達は三人揃（そろ）ってうんうんと頷（うなず）き返す。

このお嬢さん達の「私至上主義」は、鳴りを潜める気配すらない。そこまで持ち上げられても、当の私は面映（おもは）ゆくって仕方がないのだけれどなあ。

私達は港の中や、近くに広がっている市場もしばらく見て回って、店先の品揃えがまだ豊富である事や、行き交う人々の顔にも笑みが浮かんでいるのを確認した。

一見すると人間にしか見えない為、明らかに歓迎せざる雰囲気の数々の視線を集めるリネットが、

そんなものなど意に介さず、感想を口にする。

「食料品、嗜好品、医療品、衣類、薪に炭、武器に到るまで、どれも不足なく並んでいますね。質もそう悪いものではありません。軍に優先して回されていても、これだけの質と量を維持出来ているのは、見事なものです」

「後方の支援態勢は整っているな。元々のロマル帝国支配時代から、海外への戦争を想定した整備がなされていた都市の内の一つというのも理由の一端だろう。しかし、その機能を活用出来ているのは、太陽の獅子吼の努力あつての事には変わりない」

「次に大きく動くとしたなら、太陽の獅子吼が反乱諸勢力の盟主としての立場を確保して、大々的にアステリア皇女カライノスアート大公を討つ、と号令を発した時でしょうか？」

「エルケネイで集めた情報を考えると、反乱側も一枚岩にまとまってはいないが、帝国の勢力が残っているうちに争い合うほどいがみ合っていない様子だからね。まだ帝国という共通の敵がいる間は、血を流すほどの足の引っ張り合いはしましいよ」

私の考えを聞き、リネットがポツリと呟（つぶや）く。

「まだ、ですか」

「ああ、まだだな。東西南北、どの方角からでも現在の状況を変える。何か^が来てもおかしくない状況だ。硬直した現状が否応（いやおう）なしに変わるのも、そう遠い未来ではないよ」

「では、このウミナルの平穏も長くはないのですね。そうなった時、隔離されているロマルの人々

がどうなるか、このトルネなりに気掛かりです」

「ふむ、ロマル人の方が蜂起して血みどろの戦いを起こして、皆殺しという形で鎮圧されるか、それともロマル人側が帝国と連携して太陽の獅子吼側を殺戮してのけるか。口にするのも不穏ではあるが、両極端な血みどろの結果になりそうだ。レグルがどこに戦いの終着点を見出しているかも、アナではないが気掛かりだ」

「そうなりますと、やはりアナお嬢様の思うままに行動していただくのが、状況を動かすのには効果的ではないでしょうか？」

「好転するか悪化するかは、私達と王国の連携、それに北の動静次第だ」

北方の魔王軍が動けば、内紛が続くロマル帝国としても無視は出来まい。

「北……動き出す時期でしょうか？」

「隷属と宣戦布告を兼ねた使者が寄越されてもいい頃だろう。あちらの私達だけで決めてよい話ではないから、中央まで丁重にご案内せねばならん。使者を殺害して帰すのが返事という野蛮な時代でもないのだからね。使者が来てからも、まだ時間がかろうさ」

「いざ開戦となっても、なんの心配も不要とは存じますが、キルリンネとガンデウスは戦争の現場に立てないのを残念がるかもしれません」

「君以上に私に対して格好の良いところを見せたがる二人だからな。そんな事をしなくても、私はいつだって父親のような気持ちで君達を見守っているのだが……伝わらないのは私の不徳の致すと

ころだ」

「このトルネを含め、見栄を張る年頃なのだと、どうぞ大きな心でお許しください」

「もちろん、大地より広く、海より深く、そして空よりも高い心で見守るのが肝要と、父親入門関係の書籍で学んだからね」

「……そのような本をいつの間に？」

「はは、まあ、私なりに色々と学ばねばと考えた結果の一つだよ。いつ買ったかは、恥ずかしいから内緒だ」

短いが濃い付き合いをしていると自負するリネットだったが、主人の思わぬ買い物と努力には、目を丸くするのを禁じ得なかった様子だ。

そんなリネットの態度が余計に気恥ずかしくて、私は照れを隠すように笑った。

それからかなりの距離を歩き回り、休憩を取ろうとしたが、人間であるアムリアやリネット達を連れている為、屋台や食堂では冷ややかな視線を向けられた。

注文しようと近づくと、露骨に嫌な顔をされたので、私や八千代達だけで屋台で軽食を買った。

半日近く都市の住人達から悪感情に近い視線と態度を取られ続けて、さしものアムリアも精神的にかなり疲れている様子だ。

休憩する時にまで住人達の反応を窺う気にはなれず、私達は人目を避けられる寂れた広場を見つ

け、その片隅で休む事にする。

私達が口になっているのは、長いパンに色々な果実のジャムと、生の果実や干した果実を挟んだ、かなり甘めの品だ。疲れた体と精神に、甘味はとびきりの特効薬の一つだろう。飲み物の方は全員が携帯している金属製の水筒の茶や水で済ませる。

「甘い、柔らかい、酸っぱい、甘い、とても甘い、ぷちぷちしている」

「美味しいね。一日中これだけ食べていたいな」

パンを一口齧^{かじ}ったりネットとキルリンネが、それぞれ感想を口にした。

「以上、私トルネとルリの感想ですが、いかがでしたでしょうか、グヴェンダン様」

「……端的に情報が伝わる感想であると思う」

ふむ、ウチの子達はここまで教養というか、語彙^{ごい}が乏^{とほ}しかったかな？ 私自身も似たような感想ではあるのだが、もう少し聞いていて美味しそうだと思える感想が出てこないものかな。

私もまたパンを平らげながら、アムリア達の方へと視線を転じる。

あまり手入れのされていない木製の椅子にハンカチを敷いてから腰かけたアムリアに、口いっぱいに甘いのを頬張^{ほおば}る八千代と風香が立て続けに声をかける。

二人には失礼な話だが、疲れた様子の飼い主を案じる犬にしか見えない。

「アナ殿お、やっぱりこの状況の都市を歩いて回るのは問題があったでござるよう。今日はもうこれくらいで切り上げて、グド殿の用意してくださっている宿へと戻るのが吉かと」

「ハッチの言う通りにするのが一番と、このフウも考え申す。ほらあ、お日様もそろそろ海の向こうに沈みそうになっている事でござるし、今日一日、慣れない都市の中を歩いて回った疲れを癒^いさない。体を壊してしまつては元も子もござらんし」

「はい。何事も体が資本ですから、今日はもうゆっくりと休ませていただこうと思います。グドさんの——いえ、アルダム商会の船は、しばらく出港出来ない事ですし」

厳密に言くと、出港しない、が正しい。

アルダム商会を通じて国外へ脱出しようとしている私達がウミナルに滞在する口実である。不運にも船に積むはずの荷物の到着が遅れていたり、船員に欠員が出たり、船に故障が見つかったり……といった具合にたまたま不幸が重なる予定になっているからだ。

偶然とは恐ろしいものだ……ふむはははは

「それで、今日一日休んだら、明日、是非^{ぜひ}ともお付き合いしていただきたい場所があるのです
が……」

申し訳なさそうに告げるアムリアに、八千代と風香は即座に肯定の返事をした。

しかし私には、明日アムリアがする事が、彼女にとってこの都市で最大の行為となるのが薄々察せられた。アムリアからのお願いの中には、そう安請^{やすう}け合^あいするべきではないものが含まれていると、八千代と風香はきつと思ひ知るなるだろう。

それは翌日、アムリアがロマル帝国皇女アステリアとして太陽の獅子吼代表レグルと極めて秘匿

性の高い形で対面する、という形で実現するのだった。

十

アムリア達がレグルと対面する上で留意すべき点の一つは、レグルないしは彼に近い位置にいる人間と直接接触を図る事だ。

間にアジア派もレコ派も挟まないのが肝要である。二つに割れている過激派に間に挟まれては、レグルの態度や言葉に何かしらの配慮が含まれる恐れがある。

アムリアが欲しているのは雑物を含まないレグルの純粹な真意と方針なのだ。

グヴェンダン達以外の者が同行者であったなら、アムリアはこれまでの無茶を試みようとはしなかったろう。しかし、グヴェンダンとメイド三姉妹の常人離れた戦闘能力とお人好しぶりを知悉しているアムリアは、大胆な一手を選べた。

レグルは稀にだが市外にある演習場や兵舎に赴き、前線に出る兵士達を相手に手合わせをする。

あるいは指揮官以上の者達と意見交換をする為に、旧総督府から外出する事がままあるのが判明している。

彼の立場上そう頻繁に行われるわけではないが、幸いにしてグヴェンダンならば太陽の獅子吼側が嚴重に隠蔽の魔法を施した旧総督府の中だろうと、問題なく透視出来る。

こうした事情も、アムリアの目論見に大いに味方した。

昨日一日、旧総督府に忍び込ませた虫型ゴーレムとグヴェンダンの透視によって、アジア派でもレコ派でもない、いわばレグル派と呼ぶべき者達の確認は済ませている。

彼らならばまず真つ先にレグルに情報を伝えて、指示を仰ぐだろう。そうなればアムリアとしては願ったり叶ったりである。

さて、アムリアは紛れもなくロマル帝国皇帝の血筋を受け継ぐ皇女であるが、その存在を秘匿され続けていた経緯もあり、太陽の獅子吼が素性を把握しているとは限らない。

だが幸か不幸か、アムリアは太陽の獅子吼がどうしても無視出来ない存在と瓜二つである。多少——いや、大いに不安は残るが、その人物に成りすませば、レグルとの面談が叶う可能性は充分にあった。

すなわち、双子の姉であるアステリアに成りすますのだ。

あまりに大胆だがアムリアにしか出来ないこの作戦には、当たり前だが不安要素はある。

過去にアステリアを実際に見ているグヴェンダンによって、顔が瓜二つという点は保証されているとはいえ、その人格まで完全に真似るのはまず不可能だ。

そもそもアステリアの人格に関する情報自体が不足しているのだから、半分も真似られまい。

太陽の獅子吼にアステリアの人となりを知っている者がいる可能性は低いが、アステリアではないと看破される原因の一つとしては充分に考えられる。

立ち読みサンプル はここまで